「森を出たサルはどこへ行くのか（人生の思索ノート）」

高知工科大学総合研究所所長　水野博之 著

人類にとって「人間はどこから来てどこへ行くのか」という，この命題は，永遠の課題であろう。

先日目にした漫画に，「人間は母親の体内から生まれて墓場へ行くのよ」というフレーズがあり，思わず笑ってしまった。人生一代限りのスパンで考えればその通りかも知れないが，およそ600万年に及ぶ人類の歴史と，未知なる未来への展望を考えれば，笑ってばかりもいられない。

表紙カバーには「自らの技術で自分を滅ぼそうとする人間とは，いかなる生き物なのか。喧噪のなかで浮薄に流れがちないま，自分の道を歩んだ男たちの生き様を見ながら，立ち止まって思索するための一冊」と書かれてあるとおり，宇宙の歴史から始まり，哲学，宗教，生物や物理，はたまた政治に至るまでの論が展開されている。

著者の水野氏は，松下電器産業副社長まで勤め上げた理学博士で，工学に憧憬が深いことは言うまでもない。とかく，科学技術の面から人生を考えるような著書は，多くの場合，難しい数式などが羅列してあり，難解な文章の場合が多いが，数式は本文246ページ中１行だけという読みやすい構成となっている。もっとも，数式が入っていなければ読む気が起きないと言われる方にとっても，文中には科学技術に身を置いた先人の姿がユーモラスに描かれており，対比して書かれた先人同士の姿を，方程式のように組み立ててみるのも一興である。

ここで，目次を追いながら案内を試みたいところであるが，本書の冒頭の部分を少し引用させていただき，案内に代える。

「いったい，人間は誰がつくったのだろうか。神様がおつくりになったにしては，不公平な感じだし，自然発生的に生まれてきたにしては，実によくできている。いずれにしても，森を追われて平原に住むようになった弱いサル，すなわちわれわれの祖先は生き延びるために言葉を用い，道具を生み出し，機械へと発展させた。その進歩はとどまることを知らず，コンピュータ，バイオテクノロジー，原子力の活用と歩を進めた。そして，現代を生きるわれわれは，先人たちの知恵と工夫による文明を享受している。

だが，その反面，核問題などに見られるように，自ら開発した科学技術によって，いまや人類そのものを破滅させようともしている。

自らが生み出した技術で，自分を滅亡させ得るところまできた人間とは，いったい何者なのか。人間の性は善なのか悪なのか。はたまた，科学と宗教は相容れるのか。本書では，この不思議な生き物とその辿ってきた道を振り返り，そのうえで，われわれひとり一人が閉塞感漂う現在を，そしてこれからを，どう生きればよいのか考えてみたい。（中略）

今日を築いた先達，とくに科学技術史に名を残す人びとをベースに，宗教や経営といった分野の人びとにも光を当て，その生き様などエピソードを挟みながら，精一杯，噛み砕いた話にしてみよう。（後略）」

著書の構成は上述した内容に沿ったものとなっており，気軽に手にすることの出来るものとなっている。本書に登場する先達も，アインシュタイン，エジソンなどおなじみの方々から，加藤清正の家老だった飯田覚兵衛など，著名ではない人にも目を向けるなど多彩に亘っている。

（セルバ出版，P.247，1575円）　**（毛利　昭）**